

# 史跡渋野丸山古墳発掘調査報告書Ⅱ

2020

徳島市教育委員会

# 史跡渋野丸山古墳発掘調査報告書Ⅱ

2020

徳島市教育委員会



## 例 言

1 本書は徳島市教育委員会が史跡渋野丸山古墳の保存整備を図るために国庫補助事業で実施した発掘調査の報告書である。

2 現地調査は徳島市教育委員会社会教育課文化財係西本沙織、三宅良明が以下の期間で実施した。

2018（平成30）年1月24日～3月9日（西本）

2019（平成31）年2月1日～3月9日（三宅）

2019（令和元）年9月2日～9月30日（三宅）

3 本書の編集・執筆は西本、三宅が行った。出土遺物および遺構の製図および浄書は市川欣也（社会教育課文化財係社会教育指導員）と西本が行った。

4 遺構および遺物写真の撮影は西本、三宅が行った。

5 本調査で得られた遺物およびその記録資料は、すべて徳島市教育委員会が保管している。広く活用されることを希望する。

6 発掘調査にあたり、古墳の地権者をはじめ、以下の諸氏・諸機関から協力・助言を得た。記して感謝の意を表す。

大久保徹也 清家章 高島芳弘 中村豊 藤川智之 渋野公民館 渋野町文化財保勝会

7 発掘調査および整理作業には、以下の調査補助員および作業員諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表す。

内輪佐知 折野絵美 佐伯俊裕 竹内安廣 長楽弘之 筒井淳一 中野勝美



# 目次

例言

## 第1章 調査経過

1  洪野丸山古墳とその周辺環境	1
2  古墳時代の徳島における洪野丸山古墳の位置づけ	3
3  これまでの経緯	4
4  洪野丸山古墳の構造	5
5  整備に伴う調査経緯	5

## 第2章 調査成果

1  2017年度造出調査区	7
2  2017年度後円部北東側調査区	7
3  2018年度前方部調査区	11
(1) 第1調査区	
(2) 第2調査区	
4  2019年度前方部調査区	12

第3章 出土遺物

第4章 総括

主要参考文献

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

# 図 版 目 次

- 図版 1 2017 年度後円部北東調査区  
①南東から  
②南西から  
③基底石検出状況（東北東から）
- 図版 2 ① 2016 年度造出調査区 葺石検出状況（北東から）  
② 2017 年度造出調査区 葺石検出状況（北東から）
- 図版 3 2017 年度造出調査区  
①葺石検出状況（西から）  
②埴輪検出状況（北から）  
③ 2016 年度埴輪検出状況（南東から）  
④埴輪及び葺石検出状況（南から）
- 図版 4 2018 年度前方部第 1 調査区  
①調査区遠景（西南西から）  
②周濠内転落石検出状況（南から）  
③周濠内埋土堆積状況〔南壁〕
- 図版 5 2018 年度前方部第 1 調査区  
①基底石検出状況（南から）  
②基底石検出状況（北東から）
- 図版 6 2018 年度前方部第 2 調査区  
①周濠内転落石検出状況（南西から）  
②基底石検出状況（南西から）  
③周濠立ち上がり検出状況（南東から）
- 図版 7 2019 年度前方部調査区  
①周濠・基底石検出状況（西から）  
②基底石検出状況（北から）  
③基底石検出状況（西から）  
④基底石検出状況（南から）  
⑤周濠検出状況（北東から）
- 図版 8 出土埴輪 1
- 図版 9 出土埴輪 2
- 図版 10 出土埴輪 3

# 表 目 次

第 1 表 遺物観察表

# 挿 図 目 次

第 1 図	渋野丸山古墳と周辺遺跡	1
第 2 図	渋野丸山古墳位置図	2
第 3 図	渋野丸山古墳 測量図・復元図・調査区配置図	8
第 4 図	2017 年度造出調査区 平面図・断面図・立面図	9
第 5 図	2017 年度後円部北東側調査区 平面図・断面図・立面図	10
第 6 図	2018 年度前方部第 1 調査区 平面図・断面図・立面図	13・14
第 7 図	2018 年度前方部第 2 調査区 平面図・断面図・立面図	15・16
第 8 図	2019 年度前方部調査区 平面図・断面図・立面図	17・18
第 9 図	前方部南側復元図	19
第 10 図	前方部周濠断面比較図	20
第 11 図	出土埴輪実測図 1	23
第 12 図	出土埴輪実測図 2	24
第 13 図	出土埴輪実測図 3	25





# 第1章 調査経過

## 1 渋野丸山古墳とその周辺環境

渋野丸山古墳は、徳島市内で最も広大な面積を占める多家良地区北東部の渋野町に所在する。渋野町は勝浦川下流左岸の西方に位置し、三方向を山塊に囲まれ、その中心を西から東へ多々羅川が流れる扇状地である。

渋野丸山古墳は、隣接する方上町との境に位置する東西方向の山から南東方向に延びる丘陵先端部を切断して築かれた前方後円墳である。古墳の築造年代は墳丘形状、出土埴輪、土師器などから古墳時代中期前半に比定される。東西主軸の墳丘は前方部、後円部ともに三段に築かれているが、現在土砂や耕作土によって第一段は埋没している。墳丘全長 105 m、周濠を含めた全長は 118 m と、徳島県内では最大、四国でも富田茶臼山古墳（香川県さぬき市）に次いで第二の規模を誇る。南側くびれ部に造出を付し、周濠は山側を一部省略した盾形周濠である。

渋野丸山古墳の周辺には、新宮塚古墳、天王の森古墳、マンジョ塚 2 号墳などの前後する時期の円墳が古墳群を形成している。天王の森古墳（県指定史跡『渋野の古墳』）は直径 23 m の円墳である。墳頂部は神社社殿があるため平坦になっており、周囲もコンクリート壁で覆われている。内部主体や出土遺物も不明であるが、社殿建築の際に天井石が出たという言い伝えもある。新宮塚古墳（県指定史跡『渋野の古墳』）は、渋野丸山古墳の南南東約 750 m の丘陵先端部に位置する直径 12 m（または 20 m）の円墳で、現在は古墳上に神社が建てられている。1952（昭和 27）年に箱形石棺が発掘され、副葬品として鏡や玉類、鉄刀・鉄剣などが出土し、古墳時代中期の築造と考えられる。花折塚古墳（県指定史跡『渋野の古墳』）は現在所在



1 (伝)経塚 2 天王の森古墳 3 渋野丸山古墳 4 新宮塚古墳 5 花折塚古墳(所在不明) 6 マンジョ塚古墳(消滅)  
7 マンジョ塚 2号墳 8 鶴島山古墳群(消滅) 9 丈領古墳(消滅) 10 渋野遺跡 11 丈六遺跡

第1図 渋野丸山古墳と周辺遺跡（国土地理院発行 1:25000 地形図『徳島』使用）



第2図 渋野丸山古墳位置図（国土地理院発行 1:50000 地形図『徳島』使用）

地不明となっており、すでに消滅していると考えられる。1918（大正7）年に発掘され、当時の記録によると直径16mほどの円墳で、結晶片岩製の組み合わせ式の箱形石棺が内部主体に使われていたという。『勝浦郡志』によると、石棺の中からは2本の直刀が出土している。マンジョ塚古墳（県指定史跡『渋野の古墳』）は現状では畑地になっており消滅していると考えられる。直径12m程の円墳で、古くは鏡、三鈴、鉄剣などが出土したと伝えられているが、遺物は戦災によって所在不明となっている。輪蓋が貼り付けられた馬形埴輪片とメノウ製の勾玉が出土品として伝わっている。マンジョ塚2号墳は、徳島平野南部を流れる多々羅川左岸に位置する丘陵上に築かれた古墳である。1999（平成11）年に市道拡幅工事に伴い調査を行い、埋葬施設の蓋石を確認した。測量調査の結果、墳形は円墳の可能性が高いと考えられ、マンジョ塚1号墳と同じ尾根続きにあることからマンジョ塚2号墳と呼称されるようになった。2009（平成21）年の確認調査では墳頂において東西に長さ4.7mの結晶片岩製の埋葬施設の蓋石列が良好に残存していることが判明した。部分的に薄く粘土が残存することや、蓋石と蓋石の隙間に小石が詰められている状況などから、未盗掘の埋葬施設であると考えられる。古墳は山の斜面を利用して築かれ、測量および発掘調査の成果から直径約30mの円墳と想定している。円筒埴輪、朝顔形埴輪、家や蓋などの形象埴輪の破片が出土しており、円筒埴輪の特徴から、周辺古墳に前出する古墳時代前期後半の築造と考えられる。

## 2 古墳時代の徳島における渋野丸山古墳の位置づけ

徳島県内では、古墳時代前期に吉野川下流域の徳島市宮谷古墳をはじめとする気延山古墳群や石井町前山古墳群、鳴門・板野古墳群と呼称される鳴門市天河別神社古墳群、板野町愛宕山古墳などが築造される。吉野川下流域は弥生時代終末期から供献土器を伴う墳丘墓が造られてきた地域でもある。また、徳島市奥谷1号墳や八人塚古墳は阿波・讃岐地域に特徴的な積石塚であり、吉野川中流域には同様に積石で築かれた三好郡東みよし町丹田古墳がある。吉野川流域では、古墳時代前期後半の鳴門市大代古墳や石井町山ノ神古墳を最後に前方後円墳は見られなくなるが、それ以降も鳴門市の尼塚・カニ塚古墳や阿波市の土成丸山古墳など中規模の円墳は築かれている。一方、渋野丸山古墳の所在する勝浦川下流域に古墳が出現するのは、古墳時代前期後半頃である。渋野丸山古墳から東に1kmの丘陵上に所在するマンジョ塚2号墳からは、多角形の透かし穴やタテハケ調整を施された川西編年Ⅱ期に相当する円筒埴輪をはじめ、家や蓋などの形象埴輪、そして埋葬施設の蓋石と考えられる結晶片岩の石列が見つかった。また、勝浦川の北側を東西に流れる園瀬川流域では銅鏡と筒形銅器が出土したと伝わる勢見山古墳や、鍬形石などの腕輪型石製品を多く副葬した円墳の巽山古墳など、前期後半の古墳が見られる。続いて古墳時代中期に勝浦川下流域に築造されたのが100mを超える前方後円墳の渋野丸山古墳である。渋野丸山古墳は尾根を切って低地に巨大な墳丘を築き、周濠、造出、県内では圧倒的な量の埴輪の数、バリエーションの多い形象埴輪など畿内色の強い様相を持つ点からも、県内の他古墳とは隔絶した内容の古墳である。また、渋野丸山古墳から勝浦川を挟んで南岸に位置する小松島市子安観音塚古墳からは金銅装甲冑の出土が伝えられている。近隣では結晶片岩製の長大な竪穴式石室と粘土槨という2つの埋葬施設をそなえた前山古墳において仿製の内行花文鏡や鉄器が出土しているほか、前山遺跡からは人物埴輪や石見型埴輪などが出土している。このように、弥生終末期から墳墓が連続して築かれてきた吉野川流域と異なり、園瀬川・勝浦川流域は古墳時代前期後半から古墳群が形成されるようになった地域である。

県内では渋野丸山古墳を最後に前方後円墳の造営は終焉を迎えるが、その一方で、それに前後して結晶片岩製の箱式石棺を採用した円墳が築造されるようになる。渋野古墳群内にも小規模な墳丘と箱式石棺の埋

葬施設をもつ新宮塚古墳や花折塚古墳などが存在するが、勝浦川流域全域で見ても、他にも方上町の鶴島山古墳群、丈六町の丈領古墳群など、箱式石棺をもつ古墳が多く造られている。また、園瀬川流域においても八万町の犬山天神山古墳や恵解山古墳群のように、箱式石棺を使用した古墳群が見られる。特に恵解山1・2号墳は小規模な墳丘ながら三角板鋌留短甲や衝角付甲などの武具、武器類が豊富に副葬されている。このように徳島平野においては前方後円墳が築造されなくなって以降も多くの在地色の濃い古墳が営まれていたことから、この地域が主要河川流域を拠点として発展を遂げていたということがわかる。

古墳時代後期～終末期には、吉野川下流域の徳島市矢野古墳、穴不動古墳などにおいて畿内の影響を受けた横穴式石室を持つ円墳が築かれるようになる。園瀬川・勝浦川流域では巨石を使用した横穴式石室が露出した小松島市弁慶の岩屋古墳や、結晶片岩の割石を積んだ横穴式石室が開口した徳島市樋口古墳群などが特徴的な終末期古墳として挙げられる。1923（大正12）年刊行の『勝浦郡志』には、渋野丸山古墳西側の八幡神社境内にも羨道の長い横穴式石室が2基あったという記述があるが、現在は確認できない。一方、吉野川中流域では美馬市段の太鼓塚古墳、棚塚古墳などに代表される「段の塚穴型」と呼称される石柵を持つ特徴的な横穴式石室が造られる。

勝浦川下流域は、古墳時代前期後半から先に述べたような古墳が出現し、このうち圧倒的な規模を誇る渋野丸山古墳が県内最後の前方後円墳となる点でも、古墳時代の徳島地域における社会・政治秩序の画期を考える上で重要な地域である。そして、渋野丸山古墳の被葬者はそれ以前の鳴門・板野古墳群や気延山古墳群などの被葬者とはまた異なった地域基盤を持ち、古墳時代前期後半から中期にかけて畿内とのつながりを強め、勢力をもった集団であることが想像できる。

### 3 これまでの経緯

渋野丸山古墳は、『勝浦郡志』によると、1915（大正4）年に開墾中の地権者によって発見され、郷土史家の田所眉東により前方後円墳と認識されたとある。その後、1952（昭和27）年には地元住民により渋野古墳保勝会が結成された。翌年の1953（昭和28）年には、渋野丸山古墳が周辺の新宮塚古墳、天王の森古墳、花折塚古墳、マンジョ塚古墳とともに「渋野の古墳」として県史跡に指定されている。

1988（昭和63）年には当時指定地外であった後円部東側の民家が建替工事を計画したため、徳島市教育委員会が発掘調査を実施した。当該地は後円部の一部にあたるという調査成果から、徳島市文化財保護審議会が土地の公有化を求める要望書を県教育委員会へ提出したが、受け入れられなかった。これをきっかけに保存運動が起こり、県内有志によって「渋野丸山古墳を守る会」が結成された。1990（平成2）年に募金や県民からの寄付によって守る会が当該部分を買上げたのち、翌年土地は徳島市に寄贈され、追加指定と現地への説明板設置が実現した。

1999（平成11）年には古墳南側の市道拡幅および河川付け替え工事が計画されたため、保存協議に向けた見解を得るための発掘調査が行われ、周濠の存在が確認された。開発部局との協議の結果、南側に車道位置をずらすための設計変更が行われた。これらの協議や調査を進めるなかで古墳の県史跡の範囲が明確にされていないことや、将来的に整備活用を図るための基礎資料が不足していることなどが明らかになり、範囲確認のための測量・発掘調査を行う必要があると判断された。そして、2004・2005年度に国・県の補助を受けて発掘調査を実施した結果、渋野丸山古墳は盾形周濠、埴輪列、造出などを備える県内最大の前方後円墳であることがわかった。これらの調査成果を受けて2009（平成21）年2月には国史跡に指定、2012（平成24）年には古墳の保存管理方法や史跡内の土地利用についての基準などを定めた『史跡渋野丸山古墳

保存管理計画』を策定した。その後、一部追加指定が行われ古墳の大部分が史跡に指定されたことなどを受けて、調査整備検討委員会を立ち上げ、2017（平成 29）年度には整備活用を具体的に進めるための『史跡 渋野丸山古墳保存整備基本計画』を策定した。2013（平成 25）年度からは検討委員会の指導のもと、整備のための情報を得るための発掘調査を継続して実施している。2014（平成 26）年度からは土地の公有化に着手し、2017 年度に完了している。

#### 4 渋野丸山古墳の構造

これまでの調査の結果、渋野丸山古墳の墳丘は後円部を東に向けた東西主軸に築かれ、墳丘全長 105 m、後円部径 69 m、前方部幅 59 m、くびれ部幅 44 m、周濠を含めた全長は 118 mを測る。墳丘は前方部、後円部ともに三段築成に復元されるが、現在は北側の谷川からの土砂および後世の耕作土によって墳丘第一段は完全に埋没している。

外表施設としては墳丘斜面に葺石、第一段および第二段に円筒埴輪列がみられることがわかった。南側のくびれ部には方壇形の造出が確認されたが、山斜面のせまる北側くびれ部には造出が付されていないことも判明した。周濠は幅 4～13 mを測り、南側では盾形を呈すが、北側は背面の丘陵に制約され墳丘の外側に沿ってまわり、北側くびれ部付近の丘陵岩盤で収束し完周しない。このため、周濠全体としては左右非対称である。また、前方部北側の崖面に墳丘に沿って等高線の密な部分がみられることから、周濠を意識して自然地形を整形した可能性もある。現在、周濠南側は道路面より一段低い平坦地となっており、北側は竹林化し墳丘に沿って凹地がわずかに残っている。

葺石には古墳近辺で産出する石英質の結晶片岩製が使用されている。北側くびれ部の基底石には長辺が 60～70cmの長大な石材が使われている。また、南側では石材を墳丘と平行になるように横向きに置き、その上に石材の長軸が墳丘に垂直になるように小口を向けて階段状に積むということを繰り返す特徴的な積み方である。

埋葬施設については発掘調査が行われていないため詳細は不明だが、『勝浦郡志』によると、石取りのため後円部を掘ったところ平石や積石が出たと記されている。現在後円部中央には緩やかにくぼみが残るほか、レーダー探査では深度約 1 mの地点において、東西主軸の竪穴式石室と考えられる約 5 m×2.5 mの反応が認められたほか、盗掘坑と推測される反応も示されている。

出土遺物は、家形埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪・甲冑形埴輪・船形埴輪などの形象埴輪や、円筒埴輪、朝顔形埴輪、土師器が出土している。円筒埴輪は黒班と円形の透かし孔をもち、突帯 2～3 段、やや小ぶりで外面調整はタテハケののち B 種ヨコハケで、10 種類を超えるヘラ記号が確認されているほか、一部に線刻、赤色塗彩を施したものもみられる。これらの特徴から、川西宏幸氏の円筒埴輪編年Ⅲ期に該当し、古墳時代中期前半の所産としている（下田 2006）。

#### 5 整備に伴う調査経緯

##### (1) 調査の目的と経過

渋野丸山古墳の史跡指定以前の調査は、墳丘及び周濠規模の確定のために行われており、墳端や周濠の立ち上がり等をとらえることが主目的であった。このため、後円部やくびれ部の構造、特に耕作地であった墳

丘南側の調査は不十分であり、今後古墳を保存整備するために必要な情報が得られているとは言えない状況であった。『史跡渋野丸山古墳保存管理基本計画』においても、保存整備の前提として墳丘およびその周辺施設の規模と構造を調査で詳細に把握することが必要であるとしている。

また、葺石や埴輪列などの外表施設の残存状況や、これまでの調査でわかっていないくびれ部の状況確認や主軸上の墳裾、造出の規模などについても整備方針を検討するうえで重要であり、調査の必要性が調査整備検討委員会の中で出された。これを受けて、2013・2014（平成25・26）年度には墳丘南側第三段のくびれ部付近の形状や葺石の残存状況、段築の構造、そして墳丘北側の第一段から二段にかけてのくびれ部形状や整形手法の解明のための発掘調査を行った。2015（平成27）年度には後円部東端の確認と周濠外周の遺構確認を行った。2016（平成28）年度には墳丘南側に設けられた造出の規模や構造を把握するための発掘調査を行い、周辺で船や家などの形象埴輪片や笄形土器、小型丸底壺などが出土した（西本2017）。

『史跡渋野丸山古墳保存整備基本計画』では整備・修景のための墳丘および関連施設の追加調査についての方針を定め、2018（平成30）年度以降はこの方針を基に調査を継続している。

## （2）史跡渋野丸山古墳調査整備検討委員会

2012（平成24）年度に史跡渋野丸山古墳調査整備検討委員会を立ち上げ、古墳の保存整備及び発掘調査についての検討を進めている。調査に際しては、検討委員会および文化庁文化財部記念物課、徳島県文化資源活用課（旧・教育文化政策課）の指導助言を受け、徳島市教育委員会が行っている。調査整備検討委員会の構成については次のとおりである。

なお、所属は2019（令和元）年度のものである。

委員長	大久保 徹也	徳島文理大学文学部文化財学科教授
委員	高島 芳弘	前徳島県立博物館館長
委員	清家 章	岡山大学大学院社会文化科学研究科教授
委員	中村 豊	徳島大学社会産業理工学研究部教授
委員	佐藤 一彦	渋野町文化財保勝会会長
指導助言	五島 昌也	文化庁文化資源活用課記念物整備部門文化財調査官
	中井 将胤	文化庁文化資源活用課記念物整備部門文化財調査官
	大橋 育順	徳島県文化資源活用課 埋蔵文化財担当主査兼係長
	近藤 玲	徳島県文化資源活用課 埋蔵文化財担当係長
事務局	吉成 敏史	徳島市教育委員会社会教育課長
	山川 佳宏	徳島市教育委員会社会教育課課長補佐
	勝浦 康守	徳島市教育委員会社会教育課文化財係担当課長補佐兼係長
	三宅 良明	徳島市教育委員会社会教育課主任主査兼係長
	宮城 一木	徳島市教育委員会社会教育課文化財係主事
	西本 沙織	徳島市教育委員会社会教育課文化財係主事
	市川 欣也	徳島市教育委員会社会教育課文化財係社会教育指導員

## 第2章 調査成果

### 1 2017年度造出調査区

2017（平成29）年度は古墳の造出と後円部の接続部分の状況を確認するために、前年度の造出調査区北東部を拡張する形で4m×6mの調査区を設定した。掘削を進めると、前年度と同様ににぶい褐色層から埴輪片と葺石の転落石が面的に検出された。この調査区の位置する一段高い平坦面については墳丘第2段付近を掘削した際の土や葺石を転用して造成したと考えられる。これらの造成土を1m程度取り除くと、造出と後円部の接続部および前方部の葺石が比較的良好に残存していた。

今回の調査区で確認された前方部斜面の葺石の積み方は前年度までに調査した墳丘二～三段目斜面などで見られた小口積みと横積みの繰り返しではなく、小口積みばかりを繰り返す積み方であった。葺石に使用された石材の多くはこれまでの調査成果と同様に古墳の近隣で採れる石英質の結晶片岩（石英質片岩）だが、一部に眉山周辺に特徴的な褶曲が見られる青色の結晶片岩も使われている。葺石の積み方や向きの観察から、後円部葺石が造出葺石の下にもぐりこんでいく様子が確認でき、後円部の葺石を置いたのちに、造出や前方部の葺石を置いたことが推定できる。

前年度の調査では造出平坦面は中～近世頃の開墾によって30cm程度削られていることがわかったが、本調査区ではわずかに残存している平坦面（T.P. +8m付近）を確認した。このわずかに残存した造出平坦面において、前年度に引き続き樹立した状態の埴輪1点を検出した。出土状況から、埴輪の最下段の突帯から下が土で埋められて樹立されていたと考えられる。埴輪は上部が欠損していたものの周辺からは朝顔形埴輪の肩部や口縁部の破片が出土している。昨年度の調査成果とあわせて、造出平坦面に朝顔形埴輪を含む円筒埴輪列がめぐっていたことが確実にされた。その他の出土遺物については、葺石の転落石及び崩れた盛土を取り除くなかで埴輪小片が多く出土しているが、築造当初の位置を保つものはなかった。

### 2 2017年度後円部北東側調査区

果樹園であったことからこれまで調査が行われていなかった後円部北東に、墳端および周濠の範囲確認のための5m×15mの調査区を設定した。

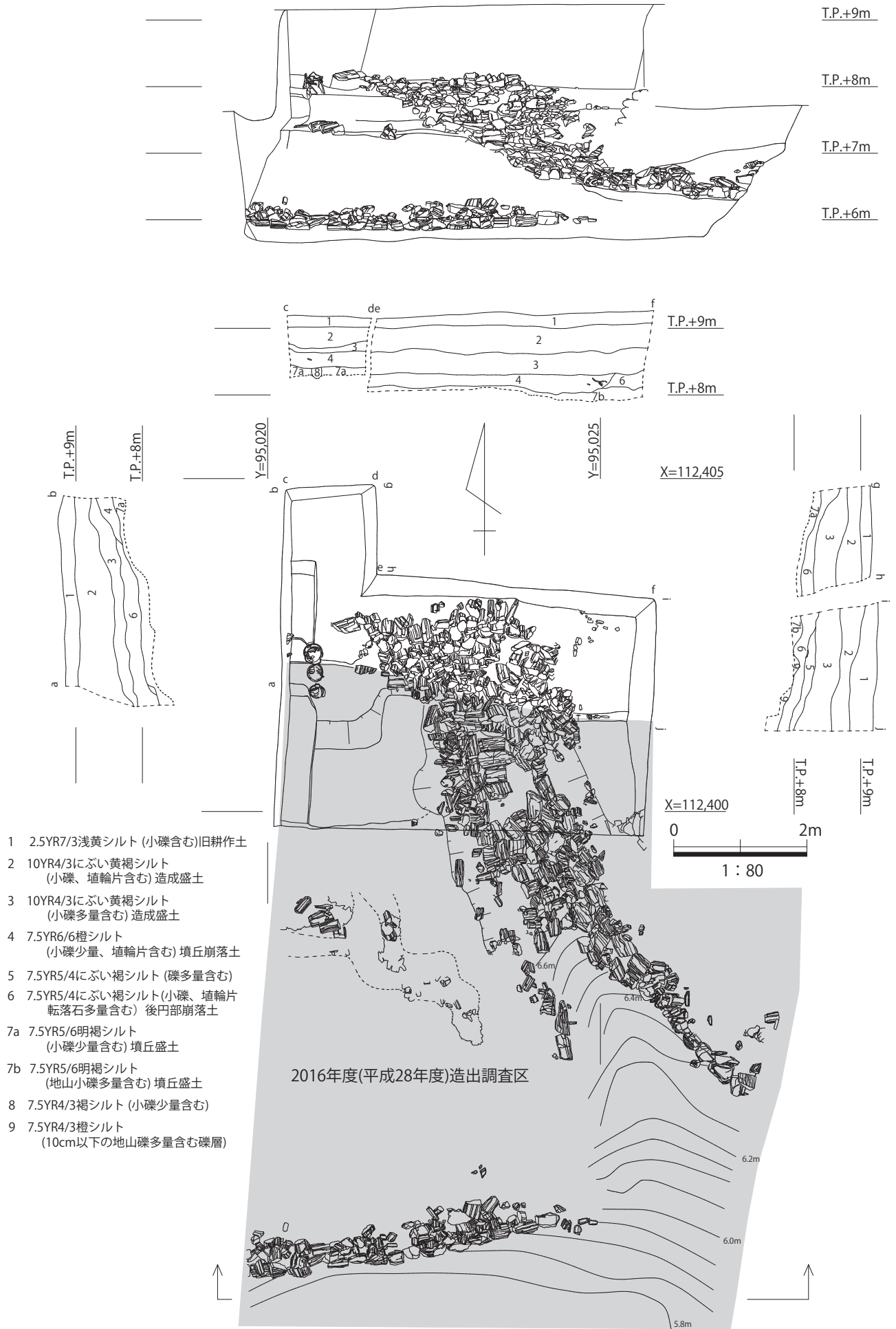
旧耕作土を取り除くと、調査区南西端では地表面から約100～120cm下で墳丘一段目斜面とその葺石を検出した。葺石は最下段の基底石を含む下から2～3段程度が残存していた。調査区南西の周濠底には2層の粘土が薄く堆積し、その上に小さな礫を多量に含むしまりの弱い土が厚く堆積していた。南西端で検出された墳丘一段目は、部分的に断ち割りした結果、礫を多く含む明黄褐色の地山と考えられる層に部分的な盛土を施して整形されたと考えられる。墳丘はT.P. 8mよりも上は削平されており残存していなかった。調査区北東側では、地山と考えられる礫を多く含む固い黄褐色土がゆるやかに立ち上がる様子を確認し、これが周濠の肩部であると判断した。本調査区では周濠外側の立ち上がりおよび肩部には葺石・埴輪等は見られなかった。

葺石は前年度までの調査でも確認したように、まず比較的大きな基底石を横方向に据えたうえで小口を向けた石材を規則的に積むという渋野丸山古墳独特の積み方をしていることがわかった。墳丘北側の周濠内とは異なり、本調査区の周濠に葺石の転落石や遺物は極めて少なかった。古墳周辺には葺石と類似した石英

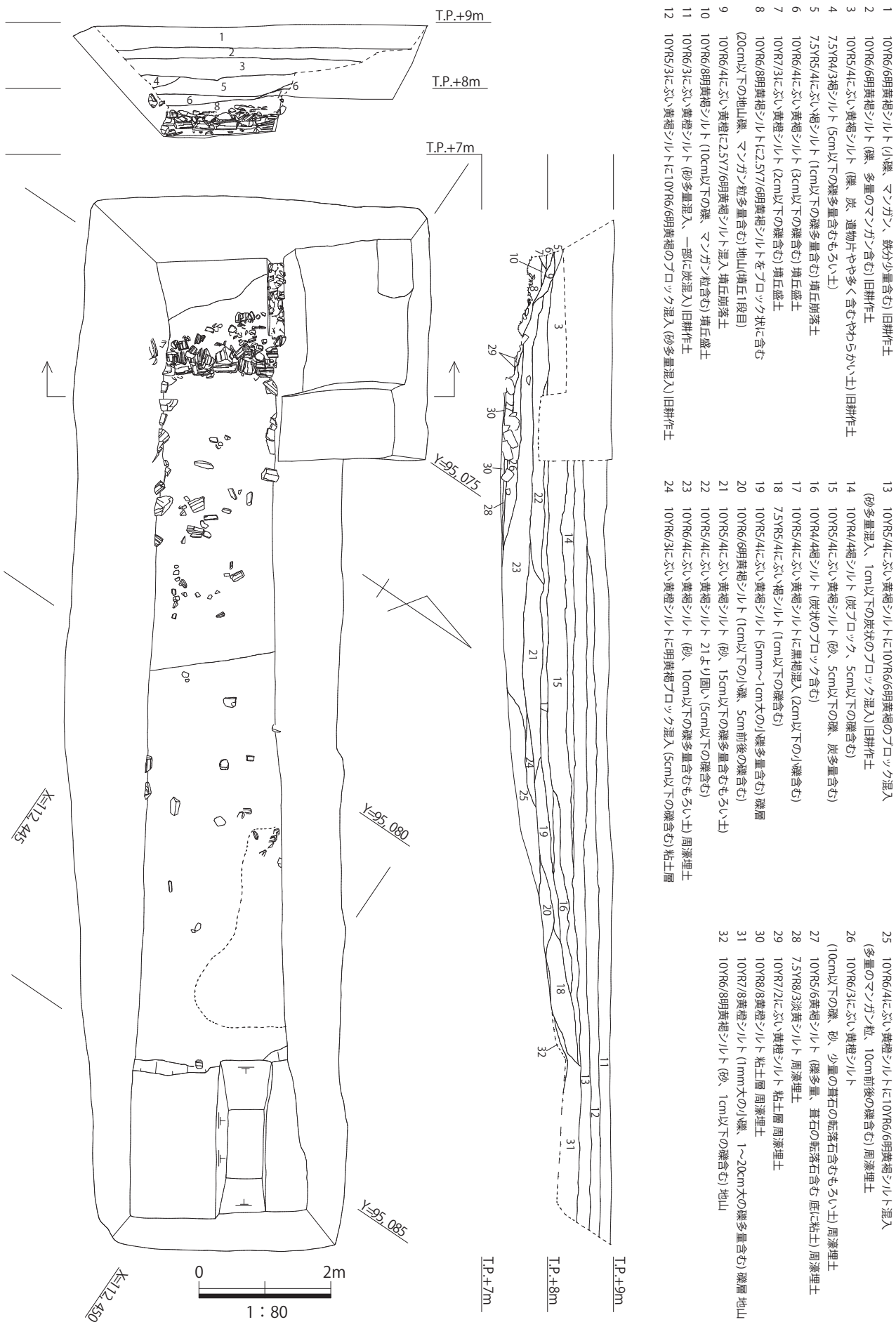




第3図 洪野丸山古墳測量図・復元図・調査区配置図



第4図 2017年度造出調査区 平面図・断面図・立面図



第5図 2017年度後円部北東側調査区 平面図・断面図・立面図

質の結晶片岩を使用した近世～近代頃の石垣や石積みの井戸などがみられることから、葺石はこれらの石材として転用された可能性がある。また、周濠底の粘土の堆積が非常に薄く、かつ部分的にしか残存していなかったことから、築造当初は滞水しておらず、空濠に近い状態であったと考えられる。また、調査区の上層にはにぶい黄褐色の旧耕作土が何層も水平に堆積していることから、後世に周濠は人為的に埋められ、墳丘を削り込んで平坦な耕作地が広げられたようだ。

本調査区からは周濠埋土および耕作土内から埴輪小片が複数出土したが、築造当初の位置を保つものはなかった。

### 3 2018年度前方部調査区

2018（平成30）年度は、前方部南側の墳丘第1段の基底部と前方部南西コーナー部を確認することを目的に、2カ所のトレンチ調査を実施した。

#### （1）第1調査区

第1調査区は、前方部南西コーナー部を確認するための第2調査区の設定に先立ち、2016・2017年度調査で検出した造出部から前方部へと延びる墳丘第1段基底部の延長ラインを確定させるために、造出部と前方部南西コーナー部との中間地点に設定した調査区である。

この調査区では、G.L. - 1.7 m（列石の下端値）で墳丘第1段の基底部が検出された。平面的には発掘前の想定ライン（墳丘復元ライン）と平行に南側へ約50cmずれていただけで、ほぼ想定どおりに基底石が検出されたことになる。この基底石と、造出部と前方部の変換点に位置する基底石との高低差は+3cm（列石下端値）であり、前方部南側の基底部は水平に築かれていたことが分かる。墳丘第1段の上部は後世の削平を受けており、基底石の下端から高さ80～90cmのみ残存していた。周濠の最深部は墳丘基底石よりさらに40cm下がる。ここでの周濠底部と造出部南側の周濠底部との高低差は+10～20cmであり、ほぼ同レベルの範疇と捉えられる。

今回の調査区内では周濠の南側への立ち上がり部分は検出できなかったが、第28、29トレンチ（2006年度）の調査結果を合わせみると、当該地付近での前方部南側の周濠の幅は基底部で11～12mを測ることになる。周濠底部付近に集中する葺石の転落石とともに出土した埴輪片の多くは円筒埴輪であり若干の形象埴輪片が混在するが、出土総量はコンテナ2箱分と、後円部周辺の調査区からの出土量に比べると面積当たりの出土量は圧倒的に少ない。

#### （2）第2調査区

第2調査区は、第1調査区の調査結果をふまえたうえで、前方部南西コーナー部を確認するために、第22トレンチ（2005年度）の一部再発掘（基底石の再検出）も含めて設定した調査区である。周濠の西側の立ち上がりを確認するための拡張区も設定した。

葺石の転落石に混じって、基底石に使われていたと思われる比較的大ぶりの結晶片岩（第1調査区検出の基底石と同様）を数石確認したが、これらは第1調査区で検出された基底石の延長と確認されるような良好な原位置での遺存状態ではなかった。しかし、第1調査区で検出された前方部南側の基底石の延長ラインと、第22トレンチで検出された前方部西側の基底石の延長ラインが交差する地点を、前方部南西コーナー部として捉えることができると考える。第22トレンチで検出された前方部西側基底石の下端と第1調査区

で検出された前方部南側基底石の下端はほぼ同じ高さである。また、周濠底部と第1調査区の周濠底部の高低差は+10～20cm程度であるが、同レベルの範疇と捉えられる。なお、墳丘の遺存部分(天端)と周濠底部の高低差は約60cmである。周濠の外側への立ち上がりを確認するために西側に拡張した調査区の南北両壁面の土層の比較から、周濠南西隅の立ち上がり部分は直線的ではなくゆるやかにカーブを描くようになっていた可能性が高いと考えられる。また、前方部南西隅付近における周濠の底部付近での幅は4m前後と想定される。周濠の外側への立ち上がりを確認した部分での周濠の残存する深さは80～90cmである。

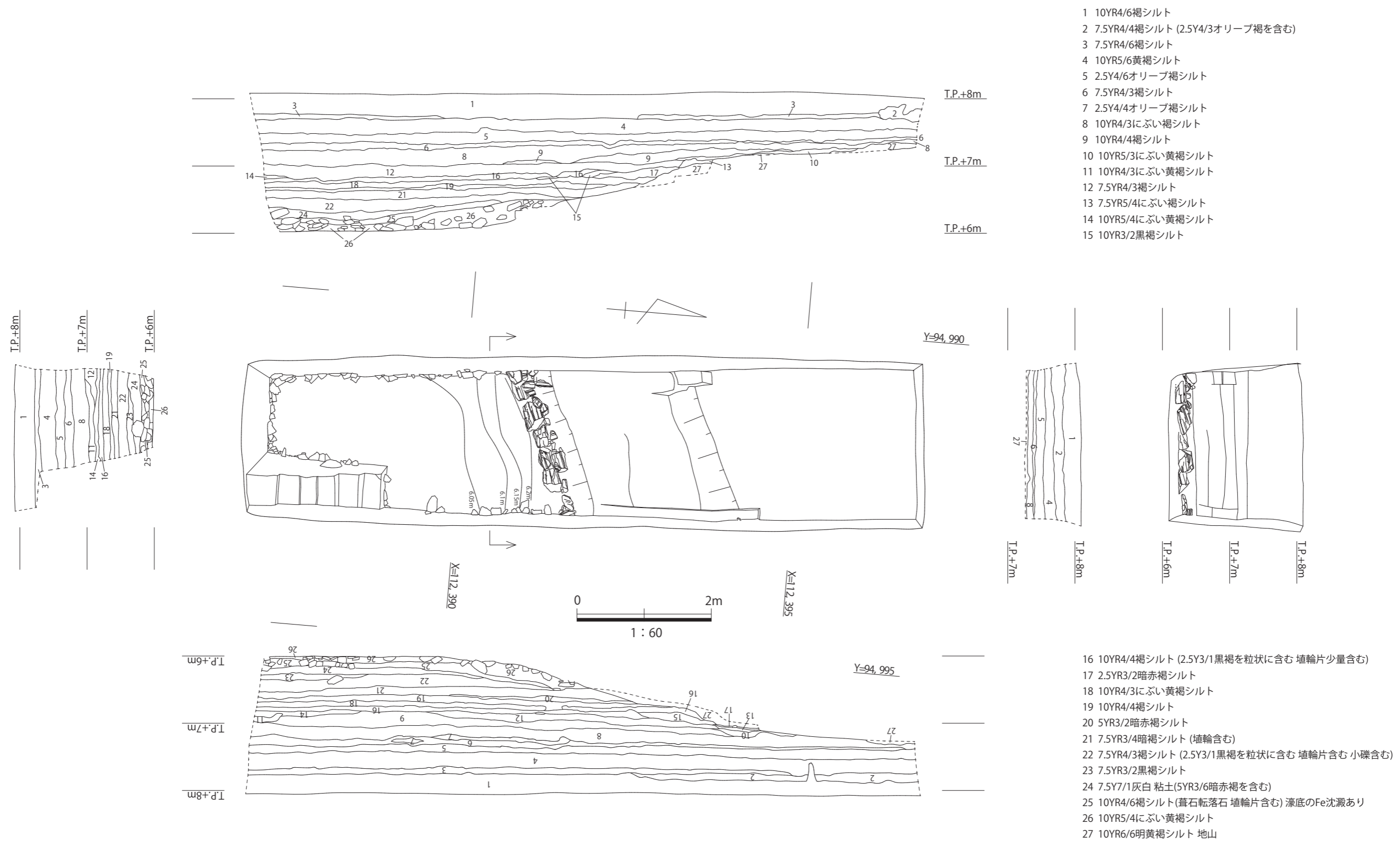
第2調査区においても転落石に混じって出土した埴輪片は、後円部周辺に比べて極めて少なかった。

#### 4 2019年度前方部調査区

墳丘前方部の周濠を確認するための発掘調査は、これまでに2004年度の第11トレンチと2018年度の第1調査区の2地点で行ったが、前者では東側(墳丘側)への濠の立ち上がり状況は明確に確認されたものの、西側への立ち上がりについては不明確であった。また後者においては、墳丘南西コーナー付近で調査を行ったが、墳丘盛土や基底部列石の遺存状態が良好でなかったことから、前方部における周濠の状態(立ち上がり状況)については十分に把握できていない状況であった。そこで2019年度は、両者のほぼ中間地点に東西方向の調査区を設定し、前方部における周濠の残存状態や立ち上がり状況を確認することを目的に調査を行った。

まず2004年度の第11トレンチと2018年度第2調査区で検出された周濠の底場ラインをそれぞれ南北に延長した地点において、周濠及び墳丘基底部の列石を検出した。土層による確認状況も踏まえ、G.L. - 1.1mの深さで周濠の上場(立ち上がりの肩部分)を、G.L. - 3.0mの深さで周濠の底部を検出した。検出できた周濠の規模は、上場で幅11.5m、底場で幅2.8m、深さ1.9mを測る。周濠底部から前方部側へと立ち上がり始める墳丘基底部では、結晶片岩の石列が検出されたが、葺石は墳丘斜面部に遺存することはなく、すべて濠の底に転落した状況であった。濠の立ち上がり部分における盛土・墳丘構築状況については、地山(第8図、第28層～第30層)を削って濠を掘った後、濠の斜面部に盛土を張り付けるように施しながら葺石を葺いていったと思われるが、この盛土は葺石とともに濠の底に転落しており(第22層)、斜面部にその痕跡はとどめていなかった。第30層、第29層、第28層より上層に堆積する第27層、第26層、第25層が墳丘第1段目を構築する時の盛土であるが、過去の調査成果も踏まえると第1段目のテラス部は後世の削平等によって消滅していると考えられる(第10図)。濠底部を中心に転落石に混ざって出土した埴輪片はコンテナ1箱分と少ない。

2019年度調査区(仮にBトレンチ)で検出された濠を、2005年度の第11トレンチ(仮にAトレンチ)と2018年度第2調査区(仮にCトレンチ)と比較すると、周濠の底部の幅は、A = 2.9m、B = 2.8m、C = 4.3mを測り、Cは南西コーナー部で幾分広がっていた可能性もあるが、AとBは同じ幅である。また、周濠の底のレベル(墳丘側基底部列石の底場の絶対高)は、A = 7.3m B = 6.94m C = 6.37mを測り、それぞれの高低差は、AとBが約50cm BとCが約40cm(CとBが約90cm)となる。以上のことから、周濠底部における傾斜角はA-B間は-1.66度、B-C間は-1.40度であり、前方部の濠の底は、丘陵側から平野部に向かって、平均-1.50度の傾斜角で緩やかに下がっていたことが分かった(第10図)。洪野丸山古墳の前方部の濠は、古墳北側の丘陵部から流れ落ちて来る雨水等を濠の南西隅部付近に集め、南側を流れる多々羅川へとオーバーフローさせるための機能を有していた可能性がある。2018年度第2調査区で検出された南西隅部の濠の古墳外側への立ち上がりは、もともとあまり高くなかったかも知れない。



- 1 10YR4/6褐シルト
- 2 7.5YR4/4褐シルト (2.5Y4/3オリーブ褐を含む)
- 3 7.5YR4/6褐シルト
- 4 10YR5/6黄褐シルト
- 5 2.5Y4/6オリーブ褐シルト
- 6 7.5YR4/3褐シルト
- 7 2.5Y4/4オリーブ褐シルト
- 8 10YR4/3にぶい褐シルト
- 9 10YR4/4褐シルト
- 10 10YR5/3にぶい黄褐シルト
- 11 10YR4/3にぶい黄褐シルト
- 12 7.5YR4/3褐シルト
- 13 7.5YR5/4にぶい褐シルト
- 14 10YR5/4にぶい黄褐シルト
- 15 10YR3/2黒褐シルト

- 16 10YR4/4褐シルト (2.5Y3/1黒褐を粒状に含む 埴輪片少量含む)
- 17 2.5YR3/2暗赤褐シルト
- 18 10YR4/3にぶい黄褐シルト
- 19 10YR4/4褐シルト
- 20 5YR3/2暗赤褐シルト
- 21 7.5YR3/4暗褐シルト (埴輪含む)
- 22 7.5YR4/3褐シルト (2.5Y3/1黒褐を粒状に含む 埴輪片含む 小礫含む)
- 23 7.5YR3/2黒褐シルト
- 24 7.5Y7/1灰白粘土(5YR3/6暗赤褐を含む)
- 25 10YR4/6褐シルト(礫石転落石 埴輪片含む) 濠底のFe沈殿あり
- 26 10YR5/4にぶい黄褐シルト
- 27 10YR6/6明黄褐シルト 地山

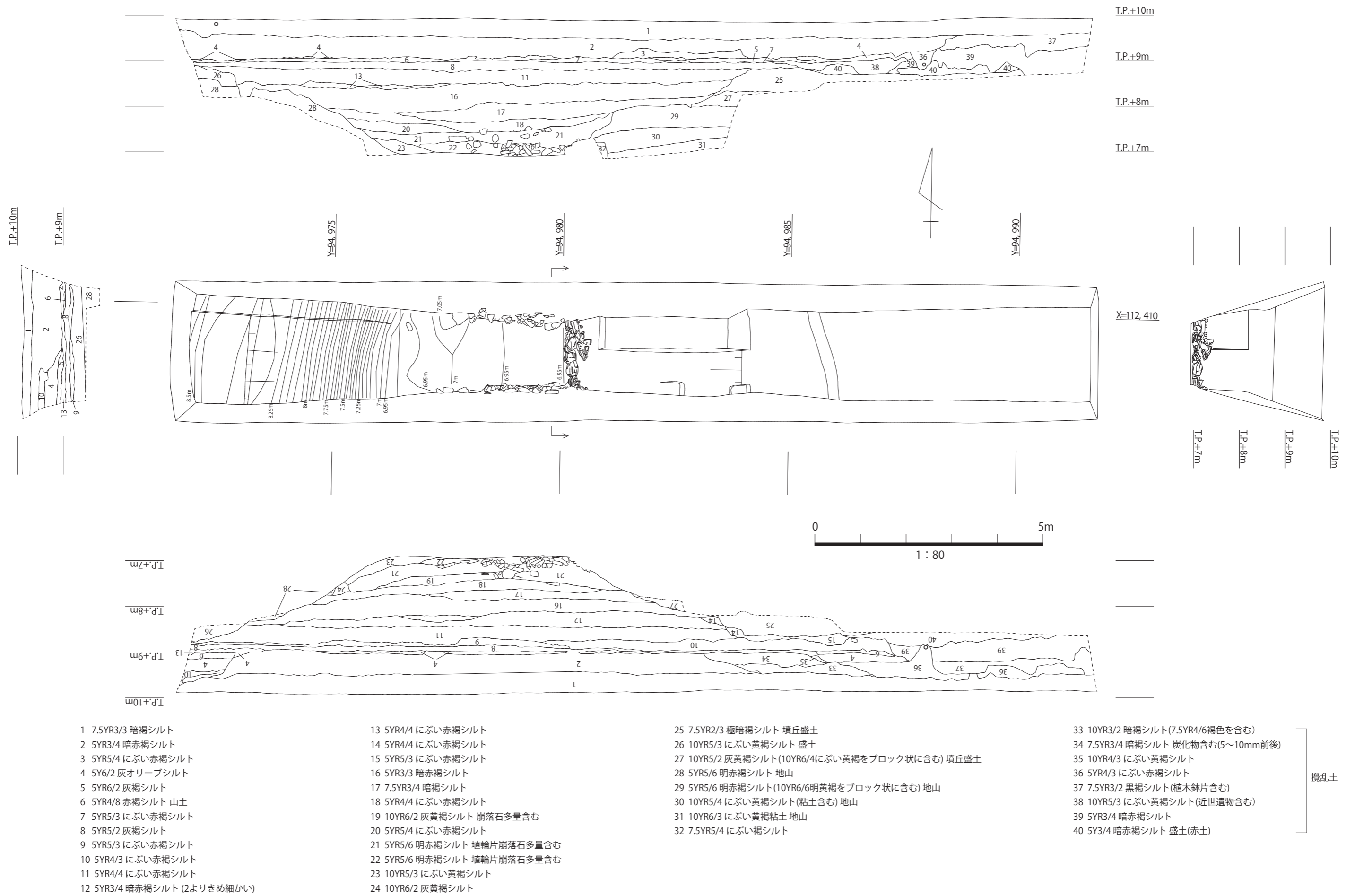
第6図 2018年度前方部第1調査区 平面図・断面図・立面図





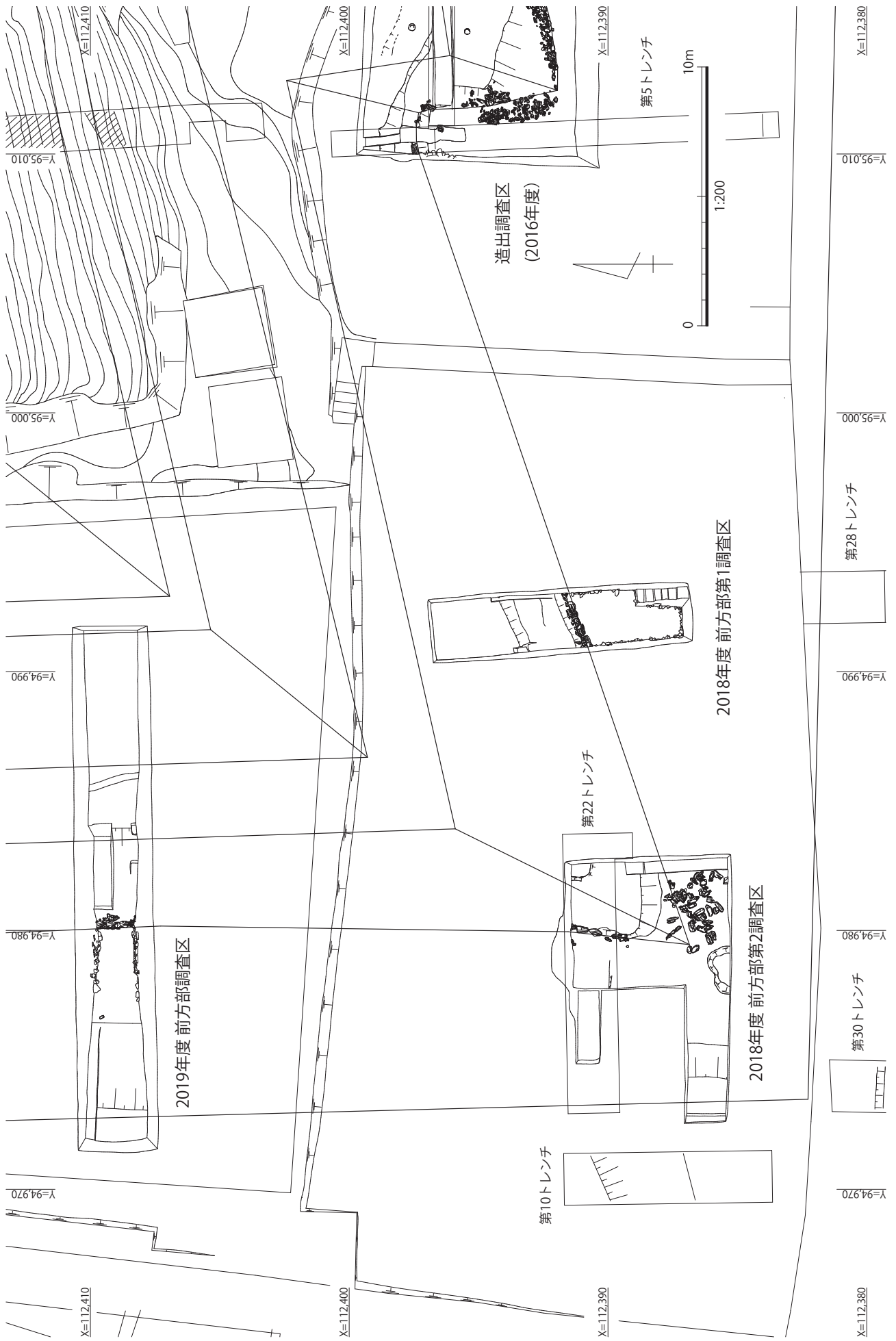




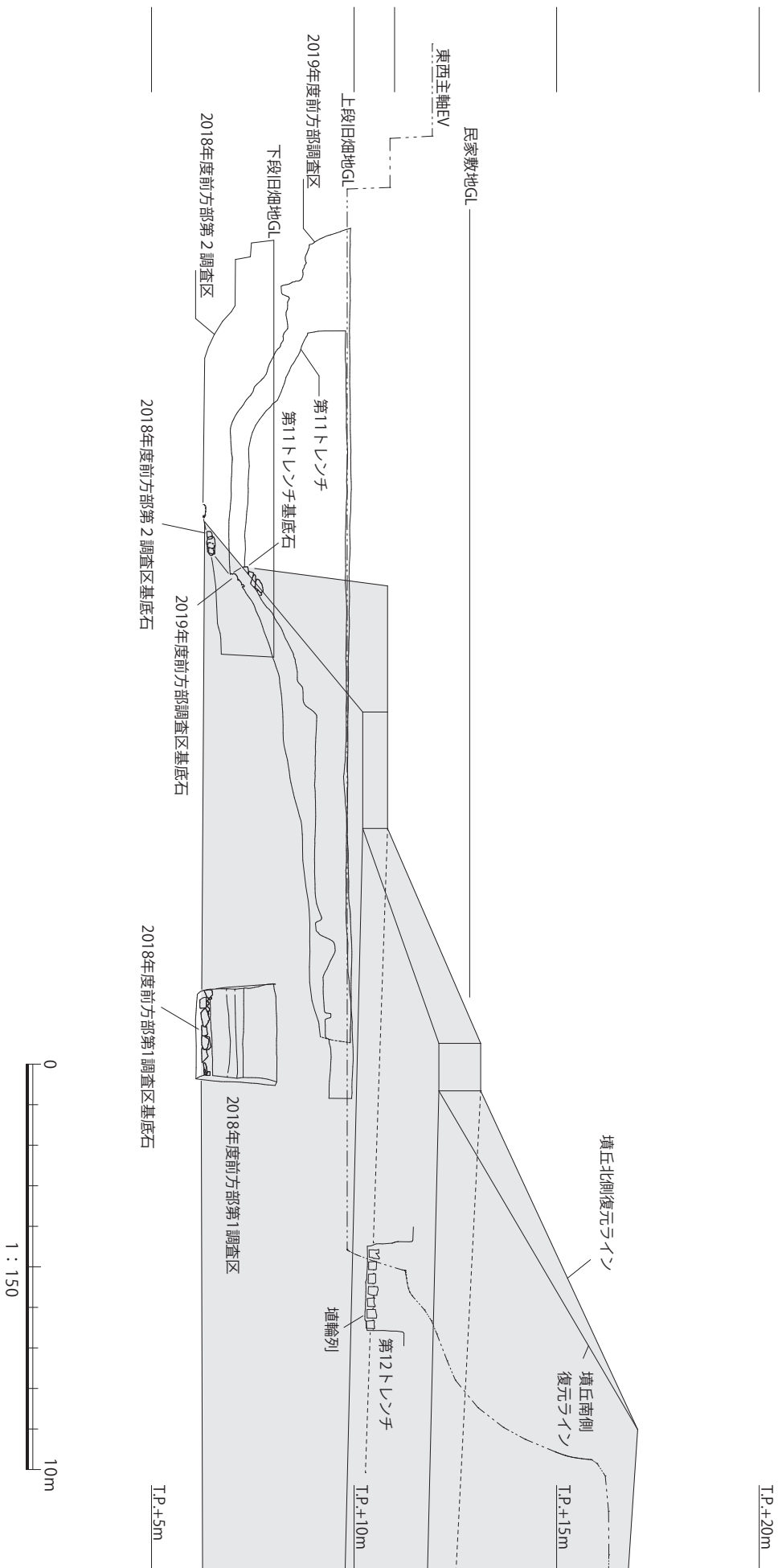


第8図 2019年度前方部調査区 平面図・断面図・立面図





第9図 前方面南側復元図



第10図 前方形部周濠断面比較図

### 第3章 出土遺物

#### 円筒埴輪・朝顔形埴輪

1は円筒埴輪の口縁部付近～底部である。口縁部端は欠損している。外面はタテハケの後B種ヨコハケが施され、黒斑が残る。内面は接合痕およびタテハケ、ユビナデが確認できる。円形の透かし孔が穿たれている。造出平坦面に樹立していた埴輪である。

2は朝顔形埴輪の口縁部付近～体部である。口縁部端は欠損している。外面はタテハケの後ヨコハケ、体部内面にはヨコナデ、口縁付近の内面にはヨコハケが確認できる。21の周辺で出土しており、前年の調査で確認した樹立埴輪の一部であると考えられる。

3、5は円筒または朝顔形埴輪の底部である。3は外面タテハケ、内面には粘土紐接合痕および斜め方向のユビナデが残る。5は外面にタテハケの後B種ヨコハケが施され、内面には斜め方向のユビナデが残る。円形の透かし孔が穿たれている。

6、4は円筒埴輪の口縁部～体部である。4は外反する口縁部を持ち、円形の透かし孔が穿たれている。口縁部端はやや四角くおさめられ、端部に近づくほど薄くなる。外面は斜め方向のハケの後ヨコハケ、内面には接合痕が確認でき、タテハケの後ヨコハケが施される。突帯は台形で、貼り付けた痕跡がある。6は外面にタテハケとヨコハケがうっすらと残るが、摩耗が激しい。内面には斜め方向のユビナデおよび斜め方向のハケが残る。口縁は外反し、端部は丸く薄くおさめる。

#### 蓋形埴輪

7は蓋形埴輪の笠部突帯付近である。

#### 盾形埴輪

8は鋸歯文および円弧状の線刻の一部が残る。表面および断面は黒色化している。

9は沈線の内側に綾杉文を省略したような斜め方向の線刻が2条施されている。片方の沈線は円弧を描いており、盾形埴輪ではない可能性もある。

10は鋸歯文と綾杉文を施された破片である。脇区の側面に綾杉文が施され、その内側に鋸歯文が施されている。断面は黒色化している。

11は鋸歯文が施された破片である。

12は鋸歯文と綾杉文を施された破片である。脇区の側面に綾杉文が施され、その内側に鋸歯文が施されている。表面はやや黒色化している。

13は鋸歯文が施された破片である。裏面には粘土の剥離痕が見られ、円筒部分との接合部であると考えられる。

14は脇区側面に綾杉文が施された破片である。

15は綾杉文とそれに平行する沈線が施された破片である。

16は鋸歯文および沈線が施された破片である。他の破片に比べて1.8mmと厚く、裏面には粘土の剥離痕が見られ、円筒部分との接合部であると考えられる。

#### 甲冑形埴輪

17 は甲冑形埴輪の草摺部分である。表面には深さ 2 mm ほどの沈線が平行に 5 条確認でき、裏面には粘土紐接合痕およびそれをナゲ消した際のユビナゲが残る。

18 は甲冑形埴輪の短甲部分であると考えられる。表面には約 1 cm の方形に削り出した表現が見られ、短甲の鉄板を綴じる皮紐を表したのと考えられる。

17、18 ともに 2005（平成 17）年度に調査を実施した第 22 トレンチにおいても同様の部位が出土している。

#### 不明形象埴輪

19 ～ 30 は器種不明の形象埴輪である。

19 は幅約 3 cm の斜めの突出部の表面に刻み目状の線刻をもつ破片である。

20 も 19 と同様の刻み目状の線刻を持つ破片であり、12 と同じ部位の埴輪であると考えられる。

21 は表面に 2 条の沈線が確認でき、裏面には粘土紐接合痕およびユビナゲが残る。沈線は家形埴輪の棟の押縁表現であろうか。

22 は鱗状の破片で、長辺に接着がはがれた跡があり、断面はやや黒色化している。家形埴輪の破風板の一部であろうか。

23 は 2 辺に接着がはがれた跡がある破片である。何らかの器材埴輪の内面を支えるパーツであると考えられる。

24 は表面に 2 条の沈線が確認できる薄手の破片である。

25 は断面 U 字を呈する破片である。内面には粘土紐接合痕とユビオサエ痕が見られる。

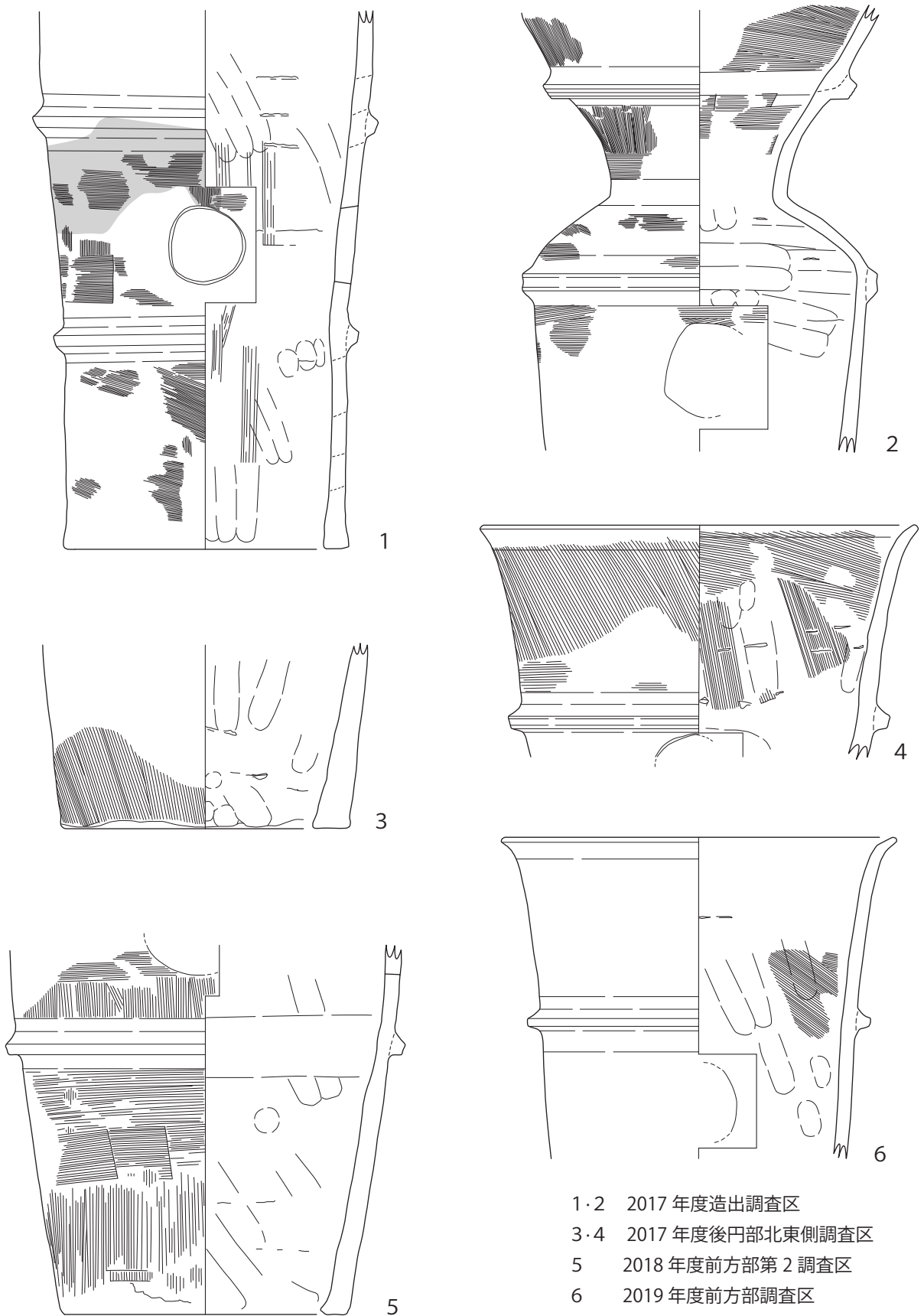
26 は面を持ち、中央には外側から穿がった直径約 2 cm の孔がある。表面及び断面は黒色化している。家や船などの一部であろうか。

27 は細長い円錐状の破片で、嘴状に中空になっている。何らかの先端部であろうか。

28 は薄い鏢状の破片である。表面に 2 条の沈線が円弧を描くように刻まれている。

29 は内部が中空になっている細長い破片で、鳥などの動物形埴輪の脚などの可能性が考えられる。

30 は漏斗状を呈する破片である。何らかの動物形埴輪の脚や頸の付け根などの可能性が考えられる。接合していた部分は剥離し黒色化している。

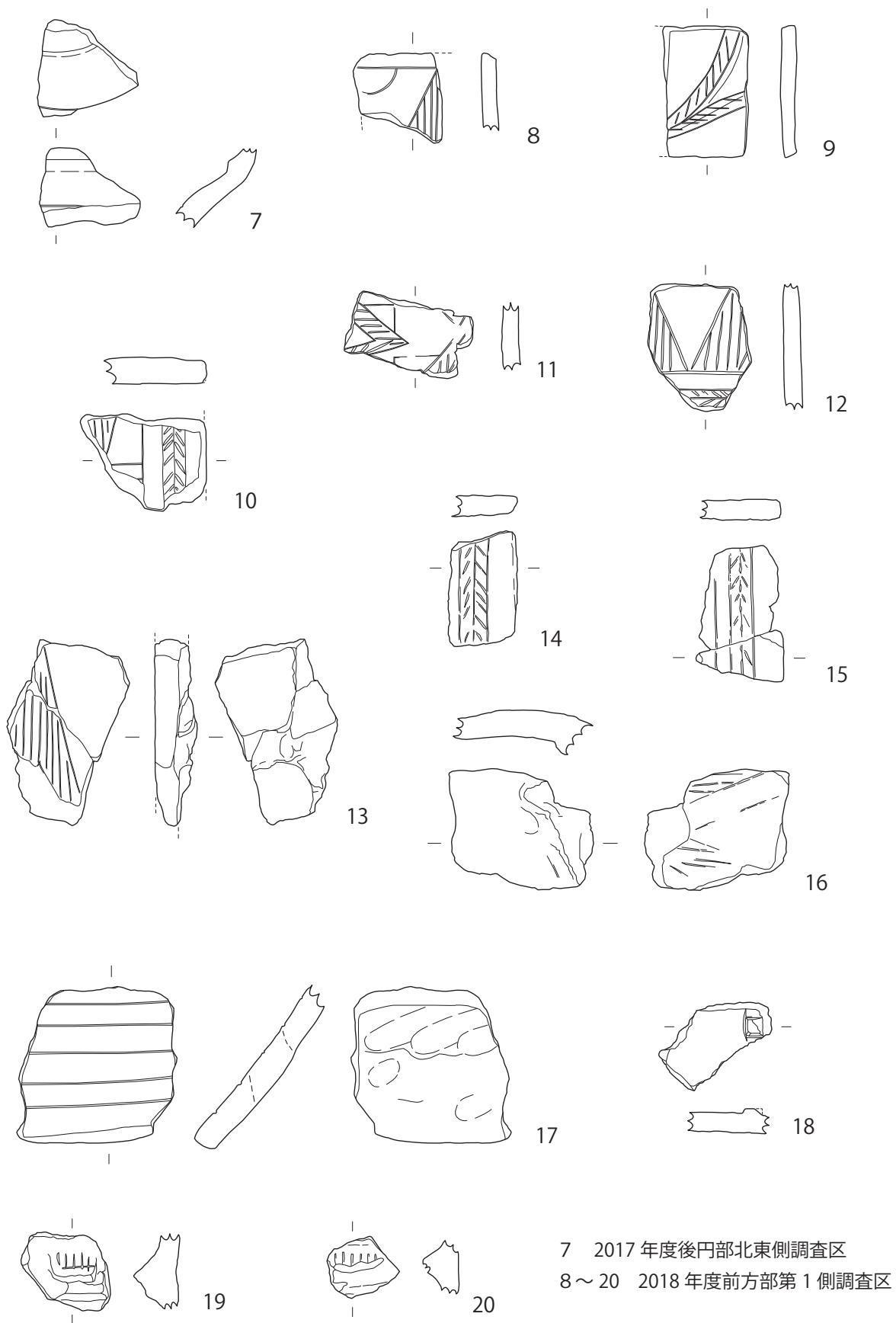


- 1・2 2017年度造出調査区
- 3・4 2017年度後円部北東側調査区
- 5 2018年度前方部第2調査区
- 6 2019年度前方部調査区

0 10cm  
1 : 4

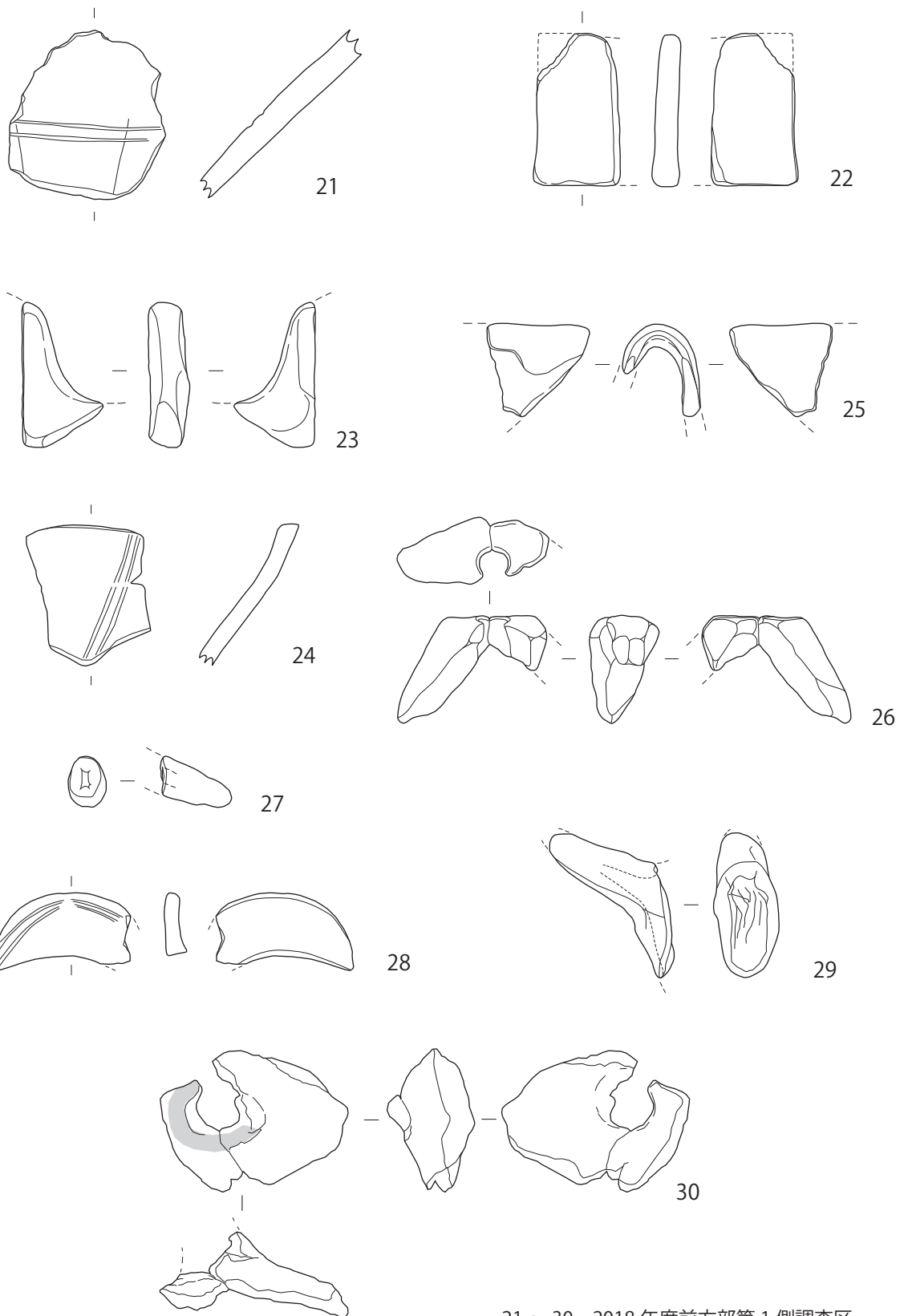
第11図 出土埴輪実測図1



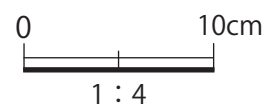


0 10cm  
 1:4

第12図 出土埴輪実測図2



21 ~ 30 2018年度前方部第1側調査区



第13図 出土埴輪実測図3

## 第4章 総括

2017年度から3か年かけて実施した発掘調査の主な目的は、保存整備事業に向けた造出から後円部の接続部、後円部北東、前方部墳裾および南西隅コーナー部の確認等であった。

造出調査区においては、造出から後円部の接続部について、後円部の葺石を置いた後、造出の葺石を置くという築造の順序を明らかにすることができたほか、わずかに残存していた造出平坦面において築造当初の位置に据えられた埴輪の底部を検出し、造出に円筒埴輪列があったことを確認した。

後円部北東側調査区では墳丘一段目の基底石および周濠を確認した。また、周濠埋土の堆積状況からは、後世に墳丘を削りこんで耕作地を広げたことがわかった。

前方部では、計3ヶ所の調査区を設定し、前方部一段目の基底石と西側周濠のたちあがりを確認することができた。南西隅コーナー部は、葺石の残存状況は悪く、基底石も残存していなかったものの、第22トレンチと2018年度前方部第1調査区、2019年度前方部調査区のそれぞれの基底石をつないだラインで推定復元することができた。前方部の3ヶ所の調査区の周濠の断面を比較すると、第11トレンチと最も南側に位置する2018年度前方部第2調査区とは約1mの標高差があり、北の山側から南の平野側にかけてゆるやかに下がっていることがわかった。

出土遺物については、すでに確認されていた形象埴輪の器種のほかに、これまで見つかっていなかったような不明形象埴輪の破片が複数出土している。円筒埴輪の年代観から、鳥などの動物形埴輪の可能性も考えられるが、小破片が多く器種を特定することはできなかった。また、これらの不明形象埴輪や盾形埴輪、甲冑形埴輪についてはいずれも前方部南側の周濠底付近から出土している。小破片が多いため大きく場所を動いている可能性もあるが、当初据えられていた場所を考える上で参考とすべき事項である。

以上、3ヶ年の調査成果にこれまでの調査成果も併せて渋野丸山古墳前方部墳端の確定と、周濠の立ちあがりを確認することができた。今後、後円部南側墳裾確定のための調査等を引き続き実施する予定である。

### 【主要参考文献】

- 下田順一 2006 『渋野丸山古墳発掘調査報告書』徳島市教育委員会  
田中英夫 1968 「徳島市渋野古墳群の出土品」『古代学研究』53号  
徳島県勝浦郡教育会 1923 『勝浦郡志』（1972年に名著出版より再版）  
徳島考古学研究グループ 1985 「渋野古墳群の研究」『徳島考古』第2号  
藤川智之 2009 「最盛期の埴輪群—渋野丸山古墳出土形象埴輪をめぐって—」『一山典還暦記念論集 考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会  
西本沙織 2017 『史跡渋野丸山古墳発掘調査報告書』Ⅰ 徳島市教育委員会

第1表 遺物観察表

No.	調査年度	調査区	層	器種	部位	法量	内外面調整	色調	胎土	黒斑	備考
1	2017 (H29)	造出調査区	(樹立埴輪)	円筒埴輪	口縁部付近 ~底部	底径:19.7cm 残存高: 37.2cm	外:タテハケのちヨコハケ 内:タテハケ、ナデ	黄橙	2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む	有	
2	2017 (H29)	造出調査区	(樹立埴輪)	朝顔形埴輪	口縁部付近 ~体部	残存高: 30.3cm	外:タテハケのちヨコハケ (体部)内:ヨコナデ (口縁部)内:ヨコハケ	黄橙	3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む	有	
3	2017 (H29)	後円部 北東側調査区	にぶい褐シルト	円筒埴輪 (朝顔形埴輪)	底部	底径:20cm 残存高: 12.7cm	外:タテハケ 内:斜め方向のナデ	浅黄橙	7mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		
4	2017 (H29)	後円部 北東側調査区	にぶい黄褐シルト	円筒埴輪	口縁部 ~体部	口径:30.3cm 残存高:16cm	外:斜め方向のハケのちヨコハケ 内:タテハケのちヨコハケ	浅黄橙	3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		
5	2018 (H30)	前方部 第2調査区	褐シルト	円筒埴輪 (朝顔形埴輪)	底部	底径:19.5cm 残存高: 25.5cm	外:タテハケのちヨコハケ 内:斜め方向のナデ	浅黄	3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		
6	2019 (R1)	前方部調査区	明赤褐シルト	円筒埴輪	口縁部 ~体部	口径:27cm 残存高: 22.2cm	外:タテハケ、ヨコハケ 内:ナデ、斜め方向のハケ	浅黄橙	4mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		
7	2017 (H29)	後円部 北東側調査区	廃土中	蓋形埴輪	笠部	残存高:5.3cm	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙	4mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		
8	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石中)	盾形埴輪	小片	—	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙	5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む	有	鋸歯文
9	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石中)	盾形埴輪?	小片	—	外:ナデ 内:ナデ	黄橙	4mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		綾杉文
10	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石中)	盾形埴輪	小片	—	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙	3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		鋸歯文、綾杉文
11	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト	盾形埴輪	小片	—	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙	4mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む	有	鋸歯文
12	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト	盾形埴輪	小片	—	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙	5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む	有	鋸歯文、綾杉文
13	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト	盾形埴輪	小片	—	外:ナデ 内:ナデ、オサエ	浅黄橙	4mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む	有	鋸歯文 粘土剥離痕
14	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石内)	盾形埴輪	小片 (脇区付近)	—	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙	5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		綾杉文
15	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト	盾形埴輪	小片	—	外:ナデ 内:ナデ	黄橙	5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		綾杉文
16	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト	盾形埴輪	小片	—	外:ナデ 内:ナデ、オサエ	浅黄橙	2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		鋸歯文 粘土剥離痕
17	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石中)	甲冑形埴輪	草摺	—	外:ナデ 内:ナデ、オサエ	浅黄橙	2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		
18	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石中)	甲冑形埴輪	短甲	—	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙	3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む	有	皮紐表現
19	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石中)	不明形象埴輪	不明	—	外:ナデ 内:オサエ	淡黄	2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		
20	2018 (H30)	前方部 第1調査区	にぶい黄褐シルト	不明形象埴輪	不明	—	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙	2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		19と同様部位か
21	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト	不明形象埴輪	不明	—	外:ナデ 内:ナデ	淡黄	3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		2条の沈線 家形埴輪?
22	2018 (H30)	前方部 第1調査区	にぶい黄褐シルト	不明形象埴輪	不明	—	ナデ、オサエ	黄橙	4mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む	有	家形埴輪?
23	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石中)	不明形象埴輪	不明	—	ナデ、オサエ	黄橙	3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		
24	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト	不明形象埴輪	不明	—	外:ナデ 内:ナデ	浅黄橙	2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		2条の沈線
25	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石中)	不明形象埴輪	不明	—	外:ナデ 内:ナデ、オサエ	浅黄橙	4mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む	有	
26	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石中)	不明形象埴輪	不明	—	外:ナデ、オサエ 内:ナデ、オサエ	浅黄橙	3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む	有	
27	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト	不明形象埴輪	不明	—	ナデ、オサエ	浅黄橙	1mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		
28	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト (転落石中)	不明形象埴輪	不明	—	ナデ	黄橙	2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		2条の沈線
29	2018 (H30)	前方部 第1調査区	褐シルト	不明形象埴輪	不明	—	ナデ、オサエ	浅黄橙	3mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		
30	2018 (H30)	前方部 第1調査区	にぶい黄褐シルト	不明形象埴輪	不明	—	外:ナデ 内:ナデ、オサエ	黄橙	5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・白雲母を含む		



# 写 真 图 版





①南東から



②南西から



③基底石検出状況（東北東から）

2017 年度後円部北東調査区



図版 2



①2016 年度造出調査区 葺石検出状況（北東から）

『波野丸山古墳発掘調査報告書Ⅰ』より



②2017 年度造出調査区 葺石検出状況（北東から）

※○は同一の石



① 葺石検出状況（西から）



② 埴輪検出状況（北から）



③ 2016年度埴輪検出状況  
（南東から）



④ 埴輪および葺石検出状況（南から）

2017年度造出調査区



①調査区遠景（西南西から）



②周濠内転落石検出状況（南から）



③周濠内埋土堆積状況〔南壁〕



①基底石検出状況（南から）



②基底石検出状況（北東から）



①周濠内転落石検出状況（南西から）



②基底石検出状況（南西から）



③周濠立ち上がり検出状況（南東から）



①周濠・基底石検出状況 (西から)



③基底石検出状況 (西から)



④基底石検出状況 (南から)



②基底石検出状況 (北から)



⑤周濠検出状況 (北東から)

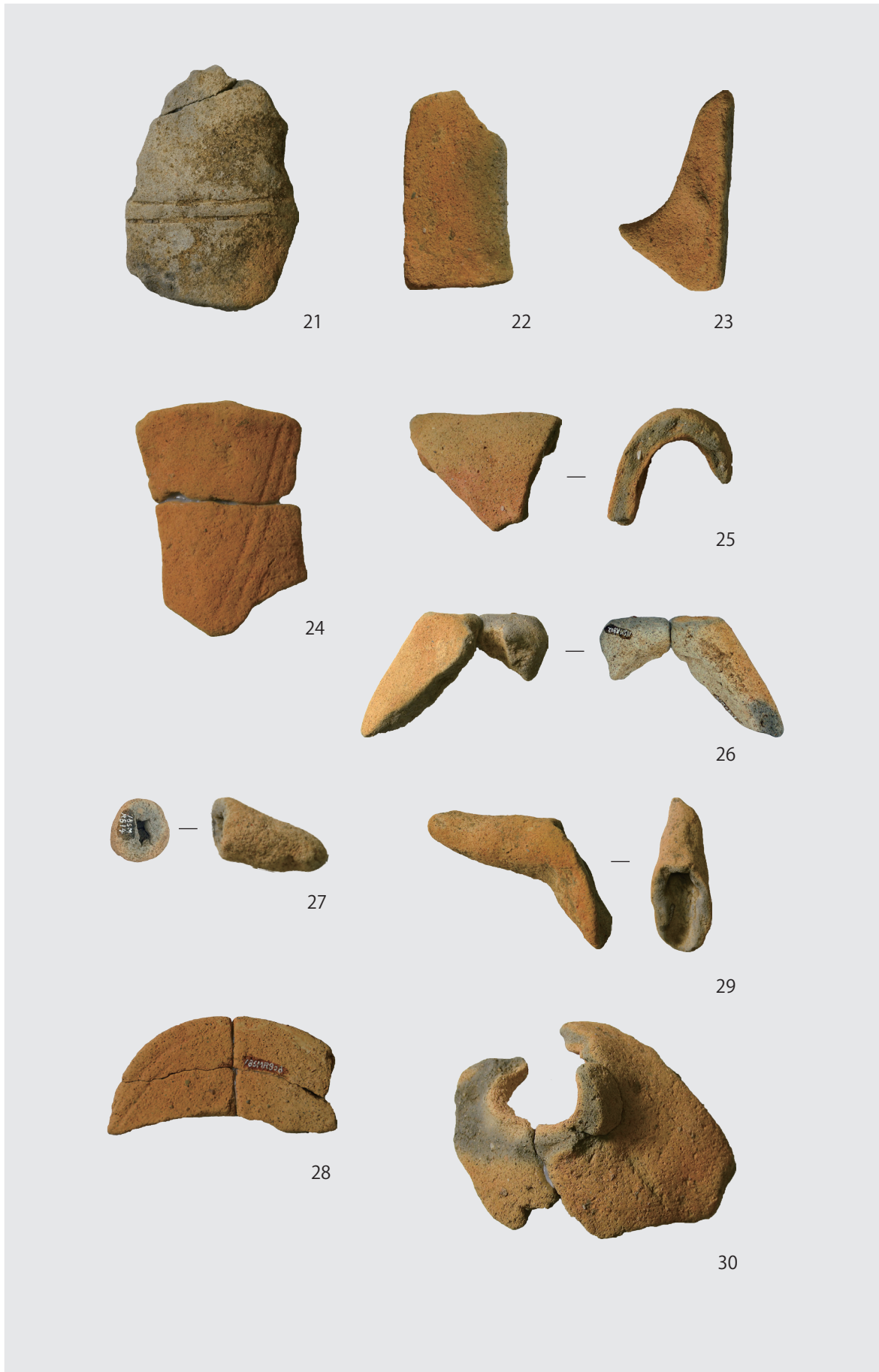


出土埴輪 1



出土埴輪 2





出土埴輪 3

ふりがな	しせきしぶのまるやまこふんはつかつちょうきほうこくしょ						
書名	史跡渋野丸山古墳発掘調査報告書						
副書名							
巻次	II						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	西本沙織・三宅良明						
編集機関	徳島市教育委員会						
所在地	〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 TEL088-621-5419						
発行年月日	2020(令和2)年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' / "	° / ' / "		
史跡渋野丸山古墳	徳島県徳島市 渋野町 三ツ岩・学頭	36201		34度 0分 33秒	134度 31分 45秒	2018(平成30)年 1月24日～3月9日  2019(平成31)年 2月1日～3月9日  2019(令和元)年 9月2日～9月30日	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
渋野丸山古墳	古墳	古墳時代		墳丘 周濠		埴輪	

史跡渋野丸山古墳発掘調査報告書Ⅱ

2020（令和2）年3月31日

発行 徳島市教育委員会

編集 徳島市教育委員会 社会教育課

印刷 星印刷株式会社